世界文學はんどぶつく

# 近松

守隨憲治著

昭和二十四年六月二十五日　印刷
昭和二十四年六月三十日　發行

近松
定價　百八拾圓

著者　守隨憲治
東京都千代田區神田東福田町一

發行者　小森田一記
東京都千代田區神田錦町三ノ十三

印刷者　白井知一

發行所　東京都千代田區神田東福田町一金井ビル　株式會社　世界評論社
電話茗荷谷(66)四九七一番
振替東京一九五〇五二番

印刷・製本　三陽山本製本所

地方賣價百九拾圓

# 序

大學の二年生の時、一夏かゝつて、卒業論文の材料の整理を目標として、上野の音樂學校へ朝から通つて祕藏の繪入狂言本を讀み耽つたことがある。近松のも、勿論あつた。それらの質のいいのは、後に『元祿歌舞伎傑作集』上下卷と銘うつて出た。高野さんが專任の教授で、その下で書記といつた恰好の五十年配の老人が居た。いつも丸本を雁飛に謄寫してゐたのを見た。その老人が高野さんからの命を承つてゐたので、僕が行くと、棚の上から支那カバンみたいなのを二つ下す。其の一つが狂言本で、それを一日に二部か三部かづゝ出して、見せてくれるのだ。もう一つは評判記の珍品揃が入つてゐた。評判記も見たいが、そこまで手を延ばす餘裕はまだ無かつた。その老人が寫してゐたのは、近松の山本版の丸本だつたので、これが、更に原稿に整頓されて、出版されたのが、『近松門左衛門全集』（十二卷）だつた。三六版の氣の利いた型だつた。近松の全集としては、帝國文庫本位だつたから、飜刻が惡くて、細かに讀むには丸本による外はなかつたのだ。水谷不倒さんの『傑作集』があつて、いゝ本だつたが、全集でないから、それだけで

は不便だつた。そこを衝いた出版だつたし、良心的な醵刻だつたので評判はよかつた。

眞面目に近松の作を讀み出したのはその頃からだつた。高野さんは發表が派手だつたが、反對に極く地味な、こつ〳〵やる人もゐた。その一人に前島さんといふ先輩が居た。卒業論文は出雲だつたさうだが、とにかく出てからずつと近松一本鎗できた人で、近松の議論は仲々風向の強い人だつた。當時の前島さんは高野さん等眼中になかつた。無理のない、あせらない態度だつたから強みがあつた。默つてゐた人なので誰も知らなかつたが、後に前島さんの文庫から、狂言本の『大名なぐさみ曾我』が現れて學界をびつくりさせた。あれは何かの拍子で、近處に住んでゐたので、僕が見せられて驚喜の餘り、世に紹介したのだつた。前島さんは目白の女子大で、長く教鞭をとつてゐたまゝで、何にも、書いて發表しなかつたが、ずつと後に、近松研究の序篇とかいつた題で隨筆風な書物を一冊出した。

その時分、大學の圖書館にゐて、和書の整理を專門にやつてゐた人で、上田先生の仕事を手傳ふといふ意味で、近松の辭書をやつてゐたのが樋口慶千代さんだつた。震災で圖書館が燒け、館長の和田さんが、責任を負つて辭職したにつれて、樋口さんもそこをやめて、丁度建上つた東洋文庫に、こゝも顧問か理事だつた上田先生から呼ばれて、移つた。岩崎文庫の主任として和田さんが据つたので、その下についたのだ。辭書の原稿はその頃大體出來上つてゐた。定量があるの



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

で、出來るだけ縮めたといつて出版されたのが、あの『近松語彙』なのだ。笹川臨風さんの膽入りで、出版記念會があつて、呼ばれて行つた時、松竹の大谷社長がゐて、向ふから挨拶されたことを覺えてゐる。

『近松語彙』の後に出たのが、藤井さんの『近松全集』だつた。近松の作は隨分多くなつた。前島さんは、所收内容に關して說があつた。學生時代に國語の研究室で芝居の臺帳を讀んでゐた頃、上田先生を訪ねて來た和服の學者が居た。今でも覺えてゐるが、琉球の飛白で揃ひの袷だつた。老書生といつた感じの人だつたが、上田先生が、君の全集は何時出來るかい、僕も辭書をやつてゐるがネ、といつた樣な式の會話を交してをられた。あとでそれが京都の主任の藤井さんと聞いて、一寸意外の樣な、又成程と思はす樣な感じだつた。東大では和服の先生は必ず紋附だつた。教育の林博太郎さんは大抵羽二重の五ツ紋か然らずんば、モーニングで、殊に自動車で有名だつた。僕などは書生だから飛白を着てゐたが、飛白はどこまでも書生にとゞまるもの、本式は無地か縞だとされてたから、着流しの時は別で、多少公式の訪問めいた時は、飛白は着なかつたのだ。だから些か驚いた。

震災の翌年、興文社が『日本名著全集』江戸文藝之部といふ叢書を刊行した。一冊一圓六十錢位だつたので、數年後に波の樣に推寄せた圓本流行の先陣を示した計畫だつた。早稻田の山口剛

さんが大體を引受けて、やり手の編輯主任加藤美命君がぐい〳〵仕事を實行に移して大成したのだつた。校訂も良心的でありオフセットで大量に入り、昔の帝國文庫を實質的に凌いだ事業だつた。これで、高野さんの助手格だつた黑木勘藏さんが淨瑠璃方面を分擔して、何冊かを手がけてゐる。それに『近松名作集』上下二冊が入つてゐる。前の『近松門左衛門全集』が、黑木さんが解題その他やつたので、今度のも內容はそれを踏襲した樣なものになつたが、解題としてはずつと詳しくできた。殊に黑木さんが、音樂學校から出した邦樂年表を整理したから、多くの淨瑠璃との關係などの點で、幾分とも新分野が開けたのだ。

前後して、博文館が帝國文庫の復活を計畫して、僕の所へ近松の世話淨瑠璃を編纂解題してくれと賴んで來た。丁度災害直後の大學のバラック研究室に勤めて居た時分で、まだ〳〵青二才ではあり、さう落着いた事も出來る筈がないが、拜み倒されの、根負けで、終にやつてしまつた。別に目新しいことも出來なかつたが、終りに『難波土產』だの『淨瑠璃譜』だの『外題年鑑』だの淨瑠璃を讀む人が必要な常識的資料をそへておいた。これは例の前島さんの入智慧だつたのだ。『外題年鑑』は寶曆版以後四種類を校合したので、今は故人になつた增田七郎君が手傳つてくれたのだ。當時四種類の版は、容易に見られなかつたから、後に或る口惡家が、あれは四種類を使つてゐ筈はない等と吹聽してゐたものだ。しかし增田君が圖書館に勤めてゐたし、僕が帝國圖書

館のある人と連絡があつたし、前島さんの藏書も貸りたしで、嘘僞なしの增田君の勞作なのだ。それは別として、僕が近松の作を叮嚀に讀んだのはこの時が始めてだつた。研究らしい頭で見通したのも始めてだつた。いゝ加減に讀むのとは大變違ふものだといふ感じをえた。

その頃から荻窪に移轉したての女子大の先生になつて、毎年新しく講義のノートを書いてゐたが、ある年近松の淨瑠璃史をやる時、藤井さんの全集に入つた古い所から調べて行つたことがある。西鶴とは違つた近松の資質を見たのはその時だつた。

筆を飛ばさう。今度近松門左衛門を書いてくれと賴まれた。近松を書かうといふ氣持はないでもなかつたが、一通りの事は、皆書かれてゐるし、若い諸君などが簡單に書きなぐつて行く中に、大した抱負もなしに筆をとる程の氣にもなれなかつた。殊には唯物的な觀方の流行してゐる今日、いはば完全な封建的人情派とでもいひたい近松を書くのは、變な氣もする。だが最近知己になつた或る米人が、主人に忠義を盡すのは、當り前なことですよ、忠義といふ辭が何故いけないんですか、と日本人のこの頃の或る意味の虛無的弱さをついて說明してゐた言葉に感じて、これは寧ろ、日本人の事實として、即ち今日にも近松はありとする事實として、書いて見ようと思ひ立つたのである。

文學的內容として世話物を主として人の愛についてもつと書きたかつたが、又折もあらう。時

代物によつて、人の恩義を書きたかつた。が、この方には、隨分多くの人の筆の跡がある。本文を讀む人は、誰でも胸に感じる部分なので、これも再度の折に讓ることとした。

目次に部別の樣なことをやつたのは、資料的に見る人の爲、文學的に見る人の爲、演劇的に見る人の爲、といふ程度の重點を考へて見たまでである。變に執筆態度の範圍を擴げたから、或る人には全然無用の部分もあらうかと思つたからなのだ。但、なるべく從來發表された近松研究に重複させない樣に心がけてみた。

昭和二十・三年八月

國立の假寓にて

守隨憲治

# 目

# 次

序……一
Ⅰ 元祿年代の大阪經濟面の一瞥……三
Ⅱ 近松傳……二七
Ⅲ 近松の藝術觀……三九
Ⅳ 特殊な作品……四五
1 心中曲……四五
2 密通曲……五四
3 妻敵討の作品……六一
4 姦通曲……七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

V 人の愛……七九
1 人の妻の愛……八一
2 母親の愛……九五
VI 取材の方法……九九
VII 組織の形式……一二五
1 時代物の場合……一二五
2 世話物の場合……一二四
VIII 近松劇演出の復活運動……一三五
XI 年譜……一五九
X 參考文獻……一六七
跋……一八九

# 近

# 松

# I　元祿年代の大阪經濟面の一瞥

戲曲に題材を提供してゐるのは、古來の傳說や歷史であつたのが、新しく開拓されて社會の巷說とか直接の事件等が含まれるやうになつたが、主題は結局觀衆側の生活にあるので、元祿年代はやはりその時代の生活相が基盤をなす。近松は情の人だつた。情の解釋が名作を產んだ。たゞし、その情の生活と相剋する、その點を把へたものだつた。倫理性を相手にして、時代物が生れ、經濟性を相手として、世話物が生まれた、といふやうな概觀がなされる樣である。その經濟的な常識面を一瞥しておく必要があるから、その要を摘むこととする。

一體貨幣經濟の社會になれば一般の物價といふものは貨幣そのものの流通狀況流通額とか製造額とかいふものによつて左右されると見るのは、今日も變らぬ常識だが、江戶時代で、特に元祿年代は、この事がある程度人爲的に計畫され實行されたのだ。だから年度的に見ていくと、物價の高下、つまり生活の難易が、その方面から、底力强く働いてゐる事を知つておく必要がある。

物價の年次的表記を作品發表の年次に比較されたいのだ。

元祿年代米價表概略

| 年號 | 米一石銀目の代價（匁を略す、カッコ内は上價） | 錢一貫文の銀替値（匁を略す） | 備考（切米とは扶持のこと） |
|---|---|---|---|
| 延寶元 | 五五（五六） | 一三・五 | 前代未聞 |
| 二 | 七四（七五）高値 | 一二 | 四月より六七月まで五畿内雨多く寒冷の爲飢饉餓死充つ |
| 三 | 六二（六五） | 一二・五 | 米穀不熟飢饉 |
| 四 | 五七（六〇） | 一二・五 | 三月より五月まで四條河原等にて粥を與へる |
| 五 | 三七（四七） | 一二・五 | |
| 六 | 四四（五六） | 一二・五 | |
| 七 | 五三（五七） | 一二・六 | |
| 八 | 六七（七〇） | 一二 | 東海道風雨津波多し、關東五畿内まで飢饉 |
| 天和元 | 七五（七九） | 一二 | 米穀豊饒、十一月江戸大火、江戸士民に三萬俵救米 |



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.